慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	利子動態説への回顧
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.1 (1946. 7) ,p.8- 25
JaLC DOI	10.14991/001.19460700-0008
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19460700-0008

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

利子動態説への回顧

氣賀健三

一

現在の資本主義經濟が何等かの形で全體的な計畫化の枠にはめられようとする時、最も重要な役割を演ずるもの一つは資本とその價格としての利子である。貨幣經濟の構造が社會主義的な計畫經濟の中で活用されるとすればー實際に活用されざるを得ないと推定されるーー利子の役割は計畫の運營上頗る重要なものがあるであらう。一國の生産活動における生産財の生産と消費財の生産との割合、その均衡、又はその歪みは必ずや利率の高さに反映せずにはゐないであらう。

近時において、經濟理論が利率の問題を繞つて展開してゐることは、資本主義的經濟の統制の實際的必要と大きな關聯をもつものであることは明かである。

利子論のこの重要性を考慮して、私はおそまきながら改めて利子の本質を考へ直してみようと思つた。

現代の利子論の出發點としてベーム・バウエルクを選ぶのは不當ではあるまい。而してその學説の後繼者又は展開者として然し擧げなければならぬのはシュムペーターである。

我が國に於ける代表的な學説例へば高田博士の利子勢力説も、中山博士の利子動態説も共にベームとシュムペーターの吟味の上に打ち立てられてゐるのである。私はそれで兩博士の主張と論爭を參照しながら、利子の本質についての一私見を覺え書的な論文で述べて見ようと思ふ。

二

ベームの大きな效績の一つは、在來の利子學説に對する徹底的な批判である。その根本は獨立生産要素としての資本財の意義を否定し、資本財自體は勞働と土地の生産物に外ならぬといふに歸着ずる。即ちシーニオアからマーシャルに至る節欲説乃至待望説に對しては、それが二重計算であるといふ批判、セイ、メンガーに至る資本用役説については用役と資本財とを別々のものと考へることの批難、更に通俗的なる價値生産力説については、資本財の利用に價値生産力があるとしても結局それは生産要素に歸屬せられる筈であるといふ論旨は、我々はこゝに一應肯定してよいと思ふ。節約乃至は享樂の延期といふ事實、資本財の利用がそれの利用の無い場合より大なる價値生産力を示すといふ事實は、ベームと共に何人も承認できることであるが、併しそれが利子を生む原因であるとは直ちに論結し難いのである。總て生産要素乃至は低次序の財の價値が高次序の財の價値より歸屬せられるといふ近代の限界效用説の立場に立つ限り、中間生産物たる資本財がその生産物との間に、ある差額を許すといふことは論理上

明かに認め難い。

そこでベームは彼獨特の時差の說を持ち込む。人は一般に將來財よりも現在財を高く評價する傾向にある。從つて兩種財貨の交換には一定の打歩が支拂はれるに至る。兩者の交換を可能ならしむるもの、換言すれば現在財を去つて將來財の供給を可能ならしむるものは、一部の人々が生產基本（卽ち享樂財及び潛在的享樂財）を豫め備へてゐることに存するのである。而して將來財のより大なる利用卽ちベームのいはゆる迂回生產の利益が存する限り、生產基本の許す限度において、之に對する需要があり、生產基本の供給に對して一定の代價が支拂はれ得ることになるのである。

時差を生む三つの理由としてベームが擧げたものについては、こゝに改めて說く必要はないであらう。それは旣に論じ盡くされた問題であり、學界の結論はベームに不利であつたといへる。

ベームに對するシュムペーターの立場はこの時差說を乘り超へて、しかも動態的意味で時差を說かうとする所から始まる。

元來ベームは靜態と動態との區別を重要視せず、又之をよく理解しなかつた如くであるが、彼の立論が、勞働人口の一定、資本の一定、欲望の一定、生產方法の一定等を前提として完全競爭の市場を問題にしてゐる限り靜態的なものであると解してよい筈である。

之に對しシュムペーターは彼獨特の仕方ではあるが、靜態と動態を區別し、一定の條件の下において自由競爭の

假定の下に極大原理が働くこと、從つて均衡狀態においては、より以上の變動への傾向が全然存在しないことが靜學的均衡の主要な特徵である。併し私は今これ等の詳しい定義について改めて說く手數を省略しよう。シュムペーターのいはうとする所は、靜學的均衡の狀態において利子は全く消滅するといふことである。利子は動態の下にのみ成立する。動態卽ち革新的な企業家が新しい生產方法を利用して、生產要素の結合を新たに企だてる時、而して新結合による利益が他の生產者の競爭を通じて行亙るに至らず、又生產要素に對する新規需要の爲にそれの價格が騰貴するに至る以前——卽ち歸屬過程が行き盡す途中において——この革新的企業家には一種の獨占的利潤が與へられる。この利潤の一部分が、資本、卽ち生產要素の用途變更のために必要な「購買力」を企業家が借入れる代價として資本家に支拂はれる。それが利子である。資本卽ち購買力を提供するものは、資本に對して利子が與へられるに至つて初めてそこに價値時差を認め、より有利なる資本の用途の選擇としてのみ、その限りにおいて之を提供する。卽ち時差は發展過程の產物であつて、靜態には存しないのである。而して過渡的、不連續的であることを本質とする利潤から永續的な利子が生ずるのは、動態下にある國民經濟の現實から說明される。

三

ベームとシュムペーターの相違は靜態と動態の區別、資本概念としての生存基本たる享樂財に對する購買力としての貨幣額、企業家概念の相違等、多端に亙るけれども、最も基本的なもの一つは、靜態におけるベームの時差

説の否定である(消費利子の説明としての時差の存在はシュムペーターの容認する所である)。而してその當然の歸結は靜態における利潤の解消、從つて生産的貸付利子の消滅である。シュムペーターの立場からは、ベームの享樂財の準備といふ資本概念を以て、自己の資本概念たる購買力に代へ、新結合の一つとしてベームの迂回生産を置いても、利子の消滅の論理は些かも障害を受けないで、ベームが猛烈に攻撃するほど自分の説はベームから離れてゐないといふシュムペーターの告白は尤もである。

シュムペーターに對するベームの辯駁の中心は、然るに時差そのもの、當否よりも、むしろ資本の需要の根元たる迂回生産の利益——之は資本の價値生産力と解してよいものである——と限度を限られたる生産基本の存在量との對立する限り、利子が消滅し難いとする點である。然かもこの二つの點はシュムペーターにおいても認められてゐる。さうである以上ベームによれば、ある價値差額が資本に歸屬するかしないかは、資本が企業家の所有に屬するか、或ひは借入れられるものであるかに存するのではない。「中間生産物の中に具體化されてゐる生産手段の量、又はその調達に必要なる購買手段の供給如何に、より多量なり、より高價額なる生産物の獲得が依存してゐるかどうかに存する」1)、換言すれば、誰が迂回生産を可能ならしめるか、購買力を有するものに外ならぬ。然らば靜態において、より長い迂回方法を利用するものには、より短い道を利用するものよりもその價値差額だけの利益が歸屬せしめられるのは必然である。」故に靜態においても利子は無ければならないといふ結論になる。

1 Böhm-Bawerk, Eine dynamische Theorie des Zinses Zeitschrift f. Volkswirtschaft, 1913 11 1頁以下參照。

惟ふに、ベームが迂回生産の長短を理由にしてその價値差額の存在を說き、そこに利子の成立を認める以上、それが本質において動態的利潤であることは明かである。而してこの差額は極大原理の實現される靜的均衡において消滅すべきことも亦明白である。蓋し差額があることは未だ適應的變動がより以上行はれる餘地のあることを示すものに外ならず、結局はより以上の迂回路の選擇が行はれることのできなくなるまで變動は持續する筈である。從つて靜態では迂回生産の選擇は全く起る餘地がなく、差額的な利潤を發生せしむべき動因はなくなるのである。

この點に關するシュムペーターの反駁は頗る明快である、ベームのいふ迂回生産の利益についても、はた又その實現に必要な一定生産基本乃至は享樂財の存在についても、共にベームの說に敢て反對しない。生産基本が迂回生産の前提條件であることはいふまでもない。併し一體、新しい結合が企だてられる時に何が必要であらうか。享樂財を新たに集めるといふことであらうか。さうではない、在來の生産要素の用途を變更する爲に別箇に購買力を必要とするといふことである。別途に生産要素を使ふことは必然的に在來の生産物(例へば食糧品の生産)の生産を減少せしめ、新しい生産物を一層長い期間を經て後に市場に齎らすであらう。その間に勞働者も地主もたしかに生活しなければならぬ、その爲には享樂財の存在は必要不可缺である、新結合において代價を支拂はれる生産要素の提供者はその所得を以て消費財を買ふであらう。——こゝに好景氣に見られる物價騰貴現象が發生する。——併しその爲に享樂財が前以て集められることは必要ではない。又必然でもない。たゞそれが充分に存在してゐなければ、消費財價格の騰貴が著しくなり、新結合の遂行が困難になる、この意味で動態的にもベームの生存基本に關する考

慮は拂はれておるのである。靜態についていへば、享樂財の存在は迂回の長さを定める條件であつてそれ以上を出ない、このこと〻利子の成立とは無關係である。それは例へば、石炭の採掘の程度はその國の蒸汽機關の存在量に依存するといふことに等しく、それ以上の關係を出ない。新しい迂回方法を採用することは卽ち企業家の發展的動分であり、利子發生の根源をなす。價値時差は舊い方法から新しい方法への迂回の時にのみ生れる。もし時差がこの際に存在しなければ、資本に對して無限の需要が生ずるから、それは制限されざるを得ない。時差の成立は必然的である。この限りにおいてシュムペーターの説はベームのそれと何等矛盾するものではない。

いな、ベームの生産力説批判の立場を承認すればシュムペーターの結論は必然的に生れて來る。一定量の享樂財の存在それ自體の承認が利子を生み出す條件であることに反對するのでなく、たゞこの事實の承認がそのまゝ利子成立の所以になることを否定するのである。それは丁度ベームが機械の生産力の承認といふことから利子の生み出す所の機械の生産力説を排斥する論理と何等變る所はないのである。

ベームとシュムペーターの論爭に關する限り、後者の論理が一貫せるものであることを私は承認したい。併し私の疑問は彼の靜態の假定にある。動態において存續せる利潤と利子とが、發展の刺戟のなくなる狀態に達する時、利子をも全く消滅させてしまふであらうか。私は以下において我が國における論爭の跡を顧みながら私見を述べようと思ふ。

四

高田博士は一應の出發點としてシュムペーターの利子動態説を承認する。[1]

1　高田保馬「利子論」第一章及第二章參照。論述が長くなることをおそれて、私は原文の引用をできる限り省略し、要旨のみを自分の解釋によつて取出す。

然るに博士はそれより更に一步進めて、現實の資本主義經濟においては、勢力の作用を取り入れて考へなければならぬとし、いはゞ第二次接近の意味での利子勢力説を提唱する。此説によれば、ベームやシュムペーターの説く如き生産要素への生産物の價値歸屬、從つて又價格歸屬は、勢力關係の存在するために阻害せられるといふ。いな詳しくいへば、生産物の價値に照應して生産要素――以下勞働のみを問題にしよう――への價値歸屬は影の形に沿ふ如く行はれるが、それは市場經濟、資本前拂ひの行はれる今日の資本主義經濟では價格歸屬として發現しない。一部分は卽ち賃銀とならないで利子となるといふのである。

博士は勞銀への歸屬が充分に行はれぬ經濟的理由として、資本の不足といふことを正面に持出す。卽ち資本が不足するから、企業家の收入たる生産物價額とその支出たる生産財價額との間に差額が殘留し、十全の價格の歸屬が行はれぬ。シュムペーターの場合には、歸屬の不充分なる理由は革新的企業家の獨占的地位に基くのであるが、博士は、たとひ獨占的地位が解消して歸屬が速かに行はれるとしても、なほそれは價格歸屬を實現するほど十　では

あり得ないといふ。十分なる歸屬の實現のためには、資本の供給が十分であることを要する。資本の供給に一定の制限がある限り、價格の歸屬は決して必然的な事柄ではない。一定の資本供給量が歸屬を十分ならしめる程のものであるか、それとも之を不十分な程度に留めるものであるかは經濟的には偶然の事柄である。しかも博士によれば一定の供給が不十分であるといふ事態を永續的ならしめる社會的事情がある。それは、即ち勢力關係、換言すれば、資本家對勞働者の階級的地位である。この階級關係の存在の故に勞働者の價格には一定の制限が置かれてゐる。この制限を認める以上、今度は資本の供給數量の如何にかゝはりなく、價格の歸屬は決して十分に行はれ難いといふことになる。

こゝまでくると、資本の不足といふことは勢力にかくれる。資本の不足が歸屬を不十分ならしめるのでなく、勞銀の抑壓といふ勢力が歸屬を不十分ならしめるのである。

博士はその勢力説が動態説の一變種であるといふ。シュムペーターは歸屬の不十分を競爭の不完全に求めるが、博士の説は之を勢力關係に求める。出發點において動態にのみ利子を認めるといふ立場は共通であるといふ。

こゝで私が疑問に思ふことは、資本の不足と歸屬並びに勢力と歸屬との關係である。博士は勢力のために資本が不足するから歸屬が十分に行はれぬといふ。果してさういふ論理が成立つであらうか。

シュムペーターを繼承する中山博士は、高田博士説を反駁して、資本の一定が資本の供給量の不足を意味することを解することを りであるとする。

1　中山伊知郎「發展過程の均衡分析」一四八頁以下參照。

歸態において資本が一定であるとすれば、その限りにおいて最も有利なる生産迂回が實現される けれどもそれ以上の有利なる生産迂回は資本の一定といふ條件によつて不可能である。從つて一旦實現された迂回生産がその規模をかへずに反覆される限り、この迂回生産に伴ふ利益は競爭と歸屬とによつて完全に生産要素に吸收されることとなり、かゝる適應の極限には餘剩利潤は消滅する筈である。一度び社會の總資本がその社會の條件の許す範圍において最有利の方法を採るときにはもはや價値差は生じない。その場合にはこの最有利の生産方法のみが唯一の生産方法として採用せられるから、之に比較さるべき他の方法は存在せず、價値差としての利潤從つて又利子は存在しなくなるのである。

中山博士の右の論旨はシュムペーターに等しい。ベームに對する批判としては十分である。併し高田博士の説に對しても十分であらうか。この點について中山博士は、豐崎稔教授の論旨に贊意を表して答へる、即ち、資本の不足が何故資本の一定と同義語であり得やうか。高田博士の證明は十分ではない、「博士の如く假に費用法則が資本不足の場合妥當しないとしても、なほそれでは生産物の價額はそれが資本不足によつてその價格を規定されてゐる生産財によつて生産されてゐる限り、何故に生産財の價格以上にならねばならないかの積極的説明にはならない」（豐崎稔氏「文獻紹介」大阪帝大、經濟學雜誌第二卷第六號八二頁）と。

競爭と歸屬によつて利子が解消すると單純にいひきつてゐる中山博士の解答は高田説に對しては決して十分とは

いひ難い。蓋しこの場合問題はこの歸屬の過程にあるのだからである。

中山博士の說に對する安井琢磨氏の批判についての同博士の解答についても同樣の不滿の感が深い。安井氏は利子解消の過程を問題とするに對して、博士は答へて曰く「吾々の論構は勞働者が任意に勞賃を引き上げ得るか否かを問題にするものではなくて、現實の勞賃とこの場合いはゞ豫想せられたる勞賃とが究極において一致すべきことを問題とするのだからである」と。

豐崎氏の批評それ自體は、高田博士も答へてゐられる如く、博士の說の核心をついてゐない。たゞ博士が資本不足を理由とするが故に餘剩が生ずるといふ表面の提唱をのみ取あげるものであり、その限りにおいて正しい。而して博士の說の弱點はこゝに存すると思はれるが、併しこの批評は博士の場合に勞力それ自體が全面的に餘剩價値成立の積極的說明となつてゐることに對する注意を全く怠つてゐる。

1　高田保馬「新利子論研究」第十七章三二九頁以下參照。

高田博士說の本質は資本の不足にあるのでなく、勞働の價格形成と生產物の價格形成との聯關が勞力によつて妨げられることを前提とするものであるから、豐崎氏の說は的を射たる批評とは認め難く、之に贊成する中山博士の說は首尾一貫性を缺いてゐるものといはざるを得ない。

私にとつての高田博士說への疑問は、資本の不足を理由とするそのことにある。博士の一應の說明は資本の不足のために利子が成立するのであるが、根本的な說明は勞力の作用によつて、資本が少くてもよいといふこと、換言すれば勞銀は低い所に抑へつけ得るから、企業家は資本の準備をば、その生產物總價額に等しいほどに整へなくても濟むといふことである。卽ち資本は個々の企業において生產物價格より少くてもよいといふことである。之は併し資本の不足の故に利子が生ずるといふ說明になるであらうか。此立場からはたとひ資本の供給がその社會全體として需要に對して餘つてゐても、卽ち遊休資本金が社會に存在してゐても、利子は勞力の故に生ずるであらう。

資本の供給が充分ならば歸屬が行はれるといふ博士の說はどう解釋すべきであらうか。假に遊休資本が利用せられるとすると、勞働者一人當りの資本の利用率がより高くなる。勞働需要が增加しても、勞銀は前提により價値歸屬を受けるほど騰貴しない。社會の價値生產力の增大につれて、生產物價額も增大する筈であるが、それが勞銀の騰貴として現はれる程度は依然として價格歸屬を十全に許さない程度に止まるものと見なければなるまい。

資本の利用が增大してもその社會の生產力が增大しないとすれば、どうであらうか。資本の價値生產力の度盛りが全體として低下する場合にかゝる事態が考へられる。之が生產方法の一定といふ假定と背くかどうかは別問題として、然る時は勞働の限界生產力も當然低下するものと考へなければならず、從つてある程度の勞銀の低下が必至となるであらう。卽ち勢力の作用を前提にする限り、餘剩價値は必ず存在することになる。併しこの場合勞働者側の反抗の勢力が勞銀低下を押し支へて丁度限界生產力に等しい價値を賃銀に置く時には、利子の消滅する均衡が考へられる。

この狀態においては、資本の供給量が丁度對立する階級の勢力關係が全然考へられない時に定まる賃銀を許すと

いふ特殊の場合が見られる譯である。それ以上に資本の供給が豊富であるならば、今度は企業家側に投資の損失が生ずることになるであらう。

然りとすれば、博士のいふ資本の供給が十分ならば、といふのは丁度階級的勢力關係に釣合つて、その作用を無いものにしても變らぬ程度に資本が供給されるならば、といふことに等しい譯であつて、資本の供給の「十分さ」それ自體に歸屬を妨げる理由があるのではない。略言すれば博士のいふ供給の十分とは勢力の作用が無ければといふに等しく、資本の不足と勢力の作用とは同議語の反覆に等しい。不足そのことに意義があるのではないと思はれる。不足は勞銀の騰貴を抑壓する勢力關係の結果であり、不足の故に低賃銀になるのでは無い筈である。從つて資本の不足といふ獨特の經濟的理由に、資本の價値生産力の根據を求められる博士の立場は私には首肯しかねるのである。その限りにおいて一定といふことと、不足といふことは別箇の概念でなければならぬ。[1]

1　私はこゝで博士の勢力説そのものには論及しようと考へない。それは當面の問題とは無關係である。

五

それでは歸屬と資本の一定とはどういふ關係に立つものであらうか。歸屬が十分に行はれるには資本供給の一定が障害となるであらうか。

歸屬は人々が極大滿足を實現しようとして自由なる代用の原則を實行する時に自づから行はれる。歸屬それ自體

をとつて考へれば資本の一定は何等障害となるものではない。一定の資本は一定の勞銀において、一定の迂回生産を可能ならしめる。もし資本の供給が減るならば、迂回生産は短縮せられねばならず、生産要素への歸屬價値も同時に減少する。資本の供給が增加すれば之と反對の現象が生ずる。一定の資本はある程度の迂回生産を許す意味をもつが歸屬を妨げる理由にはならない。

こゝまでは私の考へはシュムペーター、中山博士の説と軌を一にする。併し更に私の考へることは、勢力の作用を別にして、差額利潤の消滅の後にも絕對利潤ともいふべきものが殘留しはせぬかといふことである。

企業家間の競爭が完全であり、勞働に對する需要が又相互に競爭し、勞働者が極大滿足を求めて自由に移動する限り、歸屬は十全に行はれざるを得ない。シュムペーターの説く通り、競爭と歸屬とは餘剩價値の存在を上下から狹め、遂にその差額的な存在の餘地をなくなすであらう。之を妨げるものは競爭を妨げるものか、然らずんば高田博士の勢力であり、資本の不足それ自體ではない。

博士が勢力の作用を影にかくし、資本の不足を直接の理由にして餘剩價値を説く經路は次の如きものと考へられる、卽ち生産物の價格は常に生産財價格より上に立つ。前者が後者に等しくなるほど下らない理由は前者が價格の低下を來たす程にその供給等が增加し難いからである。何故供給が增加せられないかといふと、卽ち資本が一定限度にしか供給せられぬからであると。從つて個々の生産物の生産における餘剩價値差は消滅しても、全體としては生産物價値は生産財價値の上に位すると。

かゝる意味においてのみ資本の不足が提唱されるならば、それは當然資本の不足を來たさゞ樣に、一定の所得の範圍内において資本の不足が緩和されなければならぬと思はれる。何故かといふに、資本の供給が博士の立場に從つて無費用、無時差であるならば、資本が利子を生む限りにおいて、人々の所得の再分配が行はれ、利子を獲得しうる將來財支出に向つて現在財支出の一部分が流出しなければならぬ。それは資本の增加、生産物價格の低落・利子の消滅とならなければなるまい。

こゝに所得支出の變化、又は資本の增加を說くのは、靜態の前提に背くといふ批判が起るかもしれないが、それは正しくない。靜態においては各人の極大滿足が達せられる樣な程度において所得の時間的配分が行はれてゐる筈であり、そこにおいてこそ、より以上の變動の無い靜態的均衡狀態が達せられるのである。もし所得の再分配をしなければならぬやうな資本の一定を前提とするならば、それは資本の不足を生むやうに之を定めた誤れる出發點の想定である。靜態として資本の一定を前提に置く場合にはこの一定資本が各人に最大の滿足を生む形において所得の時間的配分が行はれてゐることを豫定しなければならぬ。從つて資本の不足を生ぜしめる如くに資本の一定を解釋するのは合理的ではない。

六

資本の不足に關する私のかゝる考へ方は、シュムペーターの靜態に關する假定について更に疑問を生むに至つた。

勢力說から離れて私は資本の不足の問題を考へよう。

今動態において利子が生じ、人々はこの利子あるが故に、より大なる滿足の追求のために、所得の一部分を貯蓄する。——貯蓄を、利子步合の高さと同じ方向に變動する、その函數と見ることは、動態的價値時差說から當然生じて來るものと見てよいであらう。——

動態における利潤獲得に則載された資本提供者は、動態のある段階においてそれ以上の發展がなくなつたとする場合、從つて利潤が解消し、提供した資本に對して利子が與へられなくなる時、どんな態度を取るであらうか、新に資本を提供することを止める。之は明かである。それだけであらうか。利子が與へられるが故に資本を提供したものは、利子無くしてはその資本を回收しないであらうか。回收すれば、それは資本消耗となり、資本量の減少となり、これまでの發展段階における規模の迂回生產は維持せられ難くなる。

然りとすれば、在來の迂回生產を維持するには、從つて新投資を誘發しないが、既に投ぜられた資本の減少を來たさない程度において利子による誘引が必要ではないか、それとも利子がある限り時差が存在し、資本の新しい供給があるとすれば、利子の消滅は靜態の必然の要請でなければならぬであらうか。

一度び利子の存在によつて供給者に時差を感ぜしめ、資本を獲得してより迂回的なる生產が可能になつたとすれば、之を維持するのには、ある高さの利子——動態において可能とせられたる利率よりは低いとしても——が必要ではないであらうか。

シュムペーターは靜態の生産者が年々同じ循環を反覆し、費用を賣上げによつて償却するのであるから、資本の借入は必要でないといふ。その通りではあるが、一度借入れた資本を絶えず維持して生産過程に引止めて置くためにはやはり利子が必要ではないか。利子がなくなれば、投ぜられた資本は引上げられ、消費財の支出に消耗されるであらう。一度び增加した生産力は減退し、人々の所得は減少するものと見なければならぬ。然りとすればある動態の過程において、それに繋がるものとして利子の消滅する靜態の經濟循環を考へることは困難である。それは現實にあり得ないばかりでなく、理論的分析の道具としても內在的な矛盾を含んでゐる。

利子の無い靜態的狀態は次の如き社會について考へられる、即ち自然的節約が十分に資本需要を賄ふほどに豐かに存在すること、資本需要は利子の刺戟なく、供給者に時差を與へなくても丁度賄はれる程度の限界收益率即ち零の收益率を示すこと、而して人口の增加が丁度資本の自然的增加によつて起る勞働需要に對應する率を示すこと、然るときは、生産方法に變化なく、人々の欲望體系に變化なく、各人の所得額に變化なく、貨幣に對する特種の事情が考へられず、たゞ計算手段としてのみ貨幣が利用される靜態的な狀態が考へられるであらう。併し資本の供給がかくの如く豐富ならざる（資本需要頗る大なる）現實の經濟においては、一度び成立した利子を解消せしめる過程は成立し得ないと考へられる。私はこの意味においてのみ、資本の不足か歸屬を不十分ならしめるといふ高田博士の解釋に接近する。併しそれは勞働への價値歸屬が價格歸屬として生じないといふのでなく、資本の稀少性にもとづいて生産價値の一部分が企業家から資本家に支拂はれるといふにすぎない。資本の供給が稀少であるといふのは、貨幣が單に計算單位たるに止まらず、一般的支拂手段として、從つて又價値貯藏の手段として特有の效用を有することから來る事情を考慮しなければならぬ。而してそれはシュムペーターの利子動態論の一展開であると考へる。勢力說における一種の搾取說ではない。生産せられたる價値の一部分が貨幣の稀少性に基いて、元本たる資本に歸屬するのである。それを反映して利子が價格として實現されると見るものである。

シュムペーターの靜態の假定が全く抽象的な構成物であつて、所得の時間的再配分を考へる必要がないとし、利子の刺戟がなくても丁度需要に引合ふ程度の資本の一定を豫想するものとするならば、かくの如き構成物は、既に證明しようとするものが豫め前提の中に用意せられてゐる證明の仕方であつて、同義語の反覆に終らざるを得ない。それは現實說明の武器たる役目を喪失するものである。併しシュムペーターの眞意はかゝる事には存しないであらう。現實の動態につながるものとして、動態に存在する利子も靜態においては解消するといふことを指摘しようとしたのであらう。さうでなくては利子動態說の意義は少いのである。

以上の回顧的な研究を通じて私は利子の存在とその高さとが資本の價値生産力と貯蓄とに依存する關係を失ふものでないことを明かにし得た樣に思ふ。その關係の仕方はもとより一方的ではなく、又單純でもない。貨幣的要素が利子歩合の決定に働き、動態における所得の變動は更に複雜な反作用を惹起する。併し基本的な事實として上記の關係を見失つてはならないと信ずるのである。